

世界口承文芸アーカイブの提案

樋口 淳

1. 中国社会科学院のシンポジウムで学んだこと

デジタルアーカイブには、①オリジナル技術で収蔵品を公開するミュージアム型、②既存の技術を利用したデータベースを公開する汎用型、の二つのタイプがある。

2015年10月11日、12日の2日間にわたって北京の中国社会科学院で開催された

CASS Forum 2015 Literature / Digitizing Oral Tradition: Strategy, Practice, and Collaboration: 2015.10.10-11 で、2001年以来、日本で行ってきた「東アジア民話のデジタルアーカイブ化」の経験を踏まえて、その現状と展望を報告した。

民話を含む口承文芸資料のデジタルアーカイブ化には、さまざまな試みがある。CASS Forum で示されたフィンランド、ドイツ、アメリカ、そして中国のデジタルアーカイブの試みは、たいへん見事で、「東アジア民話データベース」の試みは、展示や予算の規模から考えると、たいへん見劣りのするものである。CASS の場で紹介されたデジタルアーカイブは、いわば「ミュージアム型」で、所蔵する貴重な音声や映像の資料を、独自に開発したソフトウェアを利用して分かり易く公開している。そこには、今後、日本の民俗や民族の博物館が参考にすべき多くのアイデアや技術が含まれている。

しかし、そこで問題となるのは、国際協力や国際比較という視点の欠如である。たいへん皮肉なことだが、各アーカイブが独自の展示技術開発を進めれば進めるほど、その展示は「世界で一つ (unique au monde)」のものになってしまう。アーカイブが所蔵資料を囲い込み、データの汎用性が失われ、それぞれの資料が、博物館や資料館などの既存の箱とそのネットワークに閉じこめられ、島のように孤立してしまう可能性がある。

2. 東アジア民話データベース（汎用型）の特性

これに対して「東アジア民話データベース」は、まったく逆の性格を備えた「汎用型」である。わずか 50G 程度の容量しかないのに、市販の 64G の USB 一本に入れて、どこにでも携帯できる。このアーカイブは、現在のところ日本語と韓国語でしか資料検索できないが、多言語対応なので、将来的には世界中のほとんどすべての口承文芸資料を格納し、ほとんどすべての言語での検索が可能になる。

これは、アーカイブがファイルメーカーというごく一般的な汎用ソフトで設計されているため、フィンランドやドイツやアメリカや中国と、明日にでも資料交換し、共同アーカイブ・プロジェクトを立ち上げることが可能である。さらに、出来上がった国際共同アーカイブは、いつでも分離・合体可能なので、それぞれの国の研究者が、それぞれの口承文芸研究

に特化して使用することもできるし、フィンランド＝アメリカとか、ドイツ＝中国のような二国間の組み合わせも可能である。また、この5つの国の5つの言語のアーカイブに、たとえばフランスやインドネシアが新規参入することも随時可能である。こうした提案は、まったくの夢物語で、非現実的と思われるかもしれないが、デジタルの資料は、注意深く管理すれば世代を越えて生き残る。また技術も加速度的に進化する。クラウド・データの利用が日常化し、多言語間の自動翻訳が近い将来一般になるという現実を踏まえれば、この提案は、実は「夢」でも「非現実」でもなく、ごく現実的な、あたりまえの提案である。

「東アジア民話データベース」のような「汎用型」のデータベースは、①ライトであること（低予算かつ軽量）、②ユビキタスであること、③検索が多岐にわたり、しかも単純であること、④多言語的であること、⑤結合と分離が容易であること、という5つの特徴を生かして、日本のみならず世界中の「ミュージアム型」アーカイブにデータを提供できる。

3. ホームページを利用したデジタルアーカイブの可能性

「東アジア民話データベース」は、既存の博物館のような展示施設はもたないが、すでに作成した63500件あまりのデータを利用して、インターネット上に誰でも、いつでも、どこでも利用できる博物館「デジタルアーカイブ」を公開している。

たとえば、学術振興会の研究助成を受けて2017年度に展開される沖縄プロジェクトでは、図1のような手作りホームページを用意し、地図から、沖縄各地の語りにアクセスできるよう工夫し、名護の山本川恒、石垣の米盛一雄、竹富の大山功、伊平屋の山川オト、読谷の神谷カマド、金城太郎、東村の久高将亀など、沖縄を代表する語り手の話を共通語とシマクトゥバで聞くことができるように工夫した。

さらに、このネット上のデジタルアーカイブ・ホームページでは、沖縄各地の「新しい語り手」を紹介するページを用意した。ホームページ上の「沖縄の新しい語り手をシマクトゥバで語ろう・聞こう」をクリックすると、「むぬがたいの会」のメンバーが、沖縄各地の話を語る。

このホームページは、スマートフォンで閲覧できるので、わざわざ博物館や資料館に行かなくても、いつでも、どこでも沖縄民話をシマクトゥバと共通語で聞ける。

学校の国語や社会の時間にプロジェクトやモニターを用意すれば、各地の優れた伝承の語り手や、沖縄各地で活躍する「新しい語り手」と出会うことができる。たとえば、地球の裏側のブラジルの小学校で、沖縄にルーツを持つ子供たちに、沖縄の語りを提供できる「ユビキタスな博物館」である。

4. 伝承の語り手と新しい語り手をつなぐ

口承文芸の研究者の誰もが気がついている通り、21世紀に入って暮らしのスタイルや人間関係が大きくかわり、伝承の語りは伝統的な「語りの場と時と言葉」を失い、伝承の

沖繩伝承話データベース
**沖繩の民話を
 聞こう語ろう**

Language ▾

民話研究者の
みなさんへ

沖繩の新しい
語りを聞いてみよう

炭焼長者 天人女房
アカタマ婿への聞き比べ

キジムナーと
アナガヤの世界

しまくとぅばと
共通語の語り

沖繩各地の
語りを聞いてみよう

沖繩伝承話
データベースとは



図 1

新着情報

2017.11.05

沖繩伝承話データベースのホームページをリニューアルしました。
 しまくとぅばと共通語の語り、沖繩の新しい語りの紹介、キジムナーとアナガヤの世
 界など新しいページもあります。

Google+をクリックすると
SNSのコミュニティーページ
に移ります。

語りと語り手
そのものが姿
を消しつつあ
る。しかし、民
話を語りたい、
伝えたいとい
う「新しい語り
手」が、次々と
生まれている。

それらの新
しい語り手は、
①かつて祖父
母などの語り
を聞いて育ち
ながら、孫や子
のような身近

な聞き手ではなく、学校や公民館や老人ホームなどの「新しい聞き手」に語り始めた人
たち、②祖父母などの語りを聞いた経験はないが、語り手を訪ねて伝承の語りを記録したこ
とのある人たち、③伝承の語りをまったく聞いた経験がないが、本を読んだり、語りの会
に参加したりするうちに語り始めた人たち、の三つのパターンに分けられる。

「東アジア民話データベース」は、この三つのタイプの語り手のいずれをも支援したい
と考えてる。しかし、新しい語り手たちや地域の子どもたちが、「東アジア民話データベ
ース」に収められた 63500 話を自由に利用するのは難しい。そこで、ネット上のデジタル
アーカイブはデータを効率よく整理して、使いやすいものに育てていく必要が生じる。た
とえば「東アジア民話データベース」の「日本民話の聞き比べ」のページを見てみよう。
このページの「天人女房」のアイコンをクリックすると、ここには秋田県の佐藤タミから
石垣の米盛一雄まで 13 人の日本を代表する語り手の「天人女房」が紹介されている。

その他にも「桃太郎」「猿蟹合戦」「カチカチ山」などの優れた語りを聞き比べること
によって、絵本や資料集が提供しがちな「語り物のステレオタイプ」を壊して、新しい語り手
が、自分の言葉で、自由に語ることの大切さに気づくことが、期待される。

5. 口承文芸の領域横断的なデジタルアーカイブの可能性

従来、日本の口承文芸の研究者は、聞き取り調査に際してそれぞれの専門に特化する傾
向があり、他のジャンルの記録を軽視し、時には排除してきた。たとえば昔話の研究者は、

「昔話」の聞き取りに関心を傾けすぎたために、昔話以外の口承文芸のジャンルである「伝説」「神話」「世間話」をないがしろにし、更には「話」以外の「歌謡」や「俗信」などを軽視してきたことは否めない。

東アジア民話データベースも、従来から⑱分類（民話、伝説、民謡等）という検索項目をもうけ、1 昔話（10）、2 伝説（20）、3 世間話（30）、4 神話（40）、5 俗信・ことわざ（50）、6 歌（60）、7 ことばあそび・なぞなぞ（70）、8 民俗（80）、9 その他（90）という分類を行ってきたが、これは昔話中心の分類案で、伝説や神話を細かく分類整理するという配慮が足りなかった。また、それ以上に口頭伝承の記録に欠かすことの出来ない民謡や、おもろ、ユーカラのような神謡を収めることにも適していない。

この分類を、たとえば以下のように組み替えることによって、従来の民話調査でおろそかにされてきた「おもろ」や「民謡」や「踊り」を組み込むことができる。同じデータベース内に口頭伝承の様々なジャンルを組み込み、それぞれの梗概やキーワードの精度を上げれば、例えば「キツネ」や「ヘビ」のような動物、「死」のような人生の出来事が、それぞれのジャンルでどう扱われているかだけでなく、領域を横断して、語り手や地域の人々の世界観のさまざまな様相を、より広く深く理解することができる。

6. 「世界口承文芸アーカイブ」を、まず日本語で試してみる

すでに述べたように、従来のアーカイブには、地域や言語による障壁があったが、ファイルメーカーなどの多言語・多文化的な検索ソフトの特性を生かせば、世界中のあらゆる地域や民族の口頭伝承データの統合が可能であり、分離も容易である。言語の障壁を越えることが、ディープラーニングとクラウドコンピューティングの加速度的な進化によって、近い将来、可能になる。

しかし私たちが、言葉の壁を越えるには、依然さまざまな試行錯誤が必要であり、一般の支持を得ることは難しい。そこで、当面の課題として、日本語によって蓄積された世界各地の口頭伝承の記録を統合するプロジェクトはいかがだろうか。

まず手始めに日本語による「世界口頭伝承デジタルアーカイブ」を作成し、これを世界につなげるという試みが、現在の私たちの一つの目標となるのではないだろうか。

(ひぐち・あつし／専修大学名誉教授)

1*	昔話	2*	伝説	3*	神話	4*	叙事詩	5*	俗信・ことわざ・言葉遊び・謎々	6*	民謡	7*	民俗劇・踊り	8*	民俗	9*	その他
10		20	伝説	30	神話	40	叙事詩	50		60	民謡	70		80	民俗	90	その他
11	動物昔話	21	宗教伝説	31	宇宙起源	41	ユーカラ	51	俗信	61	労働歌	71		81		91	伝承事情
12	本格昔話	22	英雄伝説	32	人類起源	42	おもろ	52	ことわざ	62	祭歌	72		82		92	
13	笑話	23	起源伝説	33	文化起源	43		53	言葉遊び	63	政治風刺	73		83		93	
14	形式譚	24	異界伝説	34	動植物起源	44		54	謎々	64	生活歌	74		84		94	
15	艶笑譚	25		35		45		55		65	恋歌	75		85		95	
16	世間話	26		36		46		56		66	わらべ歌	76		86		96	
17		27		37		47		57		67	歴史伝説	77		87		97	
18		28		38		48		58		68	その他	78		88		98	
19		29		39		49		59		69		79		89		99	不明